



宇佐から出土した銅矛－安心院地域を中心に－

大分県立歴史博物館
企画普及課 越智 淳平

はじめに

大分県立歴史博物館では、令和2年度京都国立博物館考古資料相互活用促進事業を活用して、臼杵市坊主山遺跡銅矛などの大分県から出土した弥生時代の武器形青銅器を紹介する企画展「青銅の燦めき～京博所蔵の銅剣・銅矛里帰り展～」(令和2年6月30日～令和2年9月13日)を開催しました。そのなかで、れきはくコレクションやおおいたの銅剣・銅矛・銅戈のコーナーで、宇佐市から出土した資料を展示しました。今回は、その成果から宇佐、特に安心院地域の資料を中心に大分県の青銅器や青銅器の調査・研究事例について紹介します。

1 弥生時代の青銅器

弥生時代の青銅器には、銅鐸や銅剣などの武器形青銅器、銅鏡にくわえて、銅鏃や巴形銅器、鉈などの農工具有があります。その中で、銅鐸と武器形青銅器は、次第に大型化し、分布する地域が変遷することから、弥生時代を特徴づける資料と考えられています。

弥生時代前期～中期前半は、小型の銅鐸と細形～中細形の武器形青銅器が近畿から九州の西日本で共存しています。中期後半になると、九州では、中細形～中広形の銅矛と銅戈、近畿では銅鐸が中心になります。両者に加えて、瀬戸内では平形銅剣、中国・四国地方に出雲型銅剣が分布します。後期になると、九州から四国西部に広形銅矛と広形銅戈、近畿・東海・四国東部に大型の銅鐸が分布します。

2 おおいたの銅剣・銅矛・銅戈

大分県は九州の北東部にあたり、瀬戸内海の西端にあたることから、青銅器の分布も両方の地域の特徴を見ることができます。

弥生時代前期～中期には細形銅戈が細遺跡(大分市)、中細形銅剣が浜遺跡(大分市)など

で見つかっています。中期～後期の中広形銅矛は、福岡平野に近い日田・玖珠地域をはじめ、宇佐や大分地域など大分県内の各地に分布します。一方で、瀬戸内を中心に分布する平形銅剣も大分市清水ヶ迫から出土しています。後期になると広形銅矛が宇佐地域と臼杵地域を中心に分布し、四国西部へ運ばれたルートを考えるうえで重要な資料と考えられています。

弥生時代に武器形青銅器を複数埋納する事例は、宇佐・杵築(国東半島南部)・大分地域に集中しています。これらの地域には赤塚古墳(宇佐市)、小熊山古墳(杵築市)、亀塚古墳(大分市)などを始め、古墳時代前期～中期に有力な前方後円墳が築かれることから、弥生時代から他の地域に比べて優位な地域であったと考えられています。

3 宇佐から出土した銅矛

大分県内で、宇佐地域は武器形青銅器が多く分布する地域の一つです。その中で、安心院地域では4遺跡から武器形青銅器が出土しています。

切奇遺跡は、宇佐市安心院町大字鳥越に所在し、深見川支流の竜王川左岸の台地上にある遺跡です。昭和54年に学校の整備中に2本の中広形銅矛が発見されました。銅矛の出土状況や遺構の詳細は不明ですが、銅矛のサビに付着した砂の状態から、銅矛2本の刃を互い違いにして埋納していたと考えられています。1本は大分県立歴史博物館が所蔵しています。もう1本は宇佐市教育委員会が所蔵し、宇佐市安心院支所盆地ギャラリーに展示されています。

谷迫遺跡は、宇佐市安心院町大字且尾字谷迫に所在し、上ノ原台地の小さな谷の谷底にある遺跡です。昭和39年に、谷の幅約20m、台地との比高差が約10mの場所から、水田

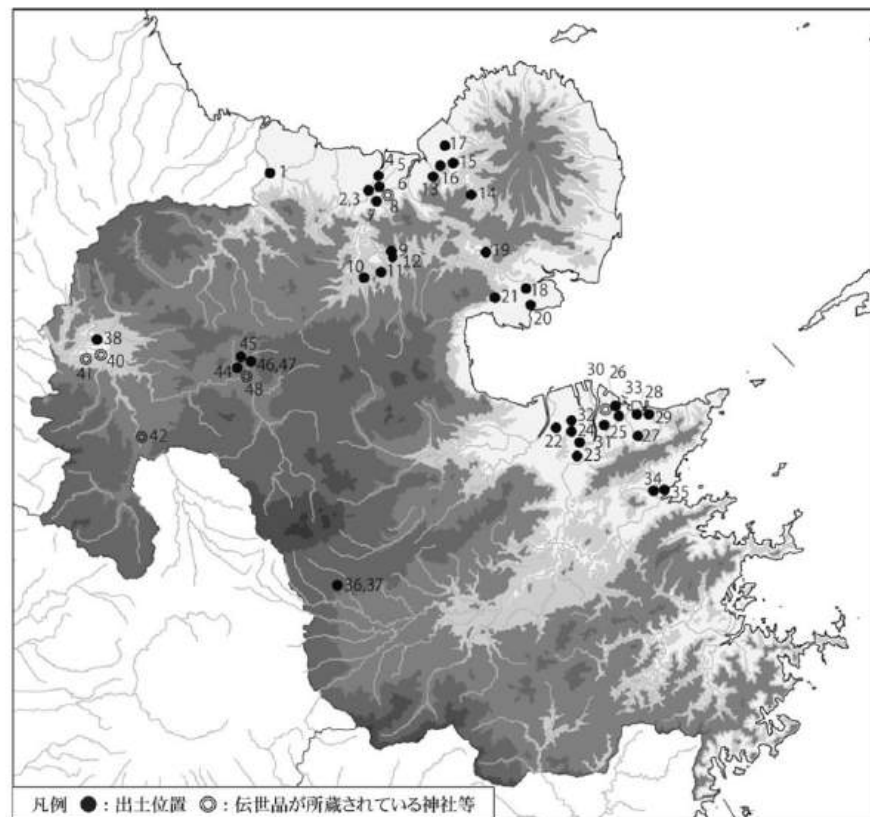


図1 大分県内の武器形青銅器出土位置図(井大樹提供)

- 1 佐知遺跡 2 上平遺跡 3 上原遺跡 4 廟森遺跡 5 小部遺跡 6 宇佐高校遺跡 7 小向野遺跡 8 宇佐神社蔵
- 9 谷迫遺跡 10 切奇遺跡 11(妻垣周辺) 12 上ノ原遺跡 13 米縄遺跡 14 横嶺遺跡 15 大原遺跡 16 雷遺跡
- 17 丸山遺跡 18 新宮遺跡 19 山口赤迫遺跡 20 真那井遺跡 21 大津遺跡 22 岩屋遺跡 23 京ヶ尾遺跡
- 24 水分神社蔵 25 清水ヶ迫遺跡 26 浜遺跡 27 名辺山谷遺跡 28 松崎遺跡 29 細遺跡 30 住古神社蔵
- 31 横尾遺跡 32 猪野遺跡 33 城原・里遺跡 34 坊主山遺跡 35 中山遺跡 36 鈴ノ木遺跡 37 猪鹿狼寺旧本堂遺跡
- 38 吹上遺跡 39(直入出土) 40 大原神社蔵 41 石井神社蔵 42 老松神社蔵 43(伝津江山) 44 元畑遺跡
- 45 角理山遺跡 46 久恵遺跡 47 仲平遺跡 48 若宮八幡神社蔵

工事に7本の中広形銅矛が発見されました。発見場1m、長さ1mの遺構があったとする説等があり、詳細な出土状況は不明です。なお、銅矛の破損が身の片方に集中していることから、刃を立てて埋納していた可能性があります。谷迫遺跡銅矛のうち3本(図5の2、3、7)は鎗を目立たせるように綾杉状に研ぎ分けられています。このような例は、佐賀県みやき町検見谷遺跡銅矛などに見られます。

また、一か所から7本の武器形青銅器が出土した例は、大分県内で現在資料が残っている事例としては最も多い本数です。

上ノ原遺跡は、『大分県遺跡地図』の位置によれば宇佐市安心院町大字口ノ坪にあり、谷迫遺跡と同じ台地上の南側から細形銅剣の切先が出土したとされます。箱式石棺から出土したとする説、昭和28年に新原遺跡から出土した資料と同一とする説などがあり、詳

細は不明です。

宇佐神宮には、現在銅矛1本と銅戈4本が所蔵されています。『宝物及貴重品台帳』（延宝（1673～1681）～大正3年（1914））に、銅矛2本と銅戈2本を「延宝宇佐郡妻垣村医師右田三省寄付」と記載されていることから、宇佐神宮所蔵資料の一部は、宇佐市安心院町大字妻垣から出土した青銅器と考えられています。なお、同地区には、行幸会で御神体が巡行する豊前国宇佐郡の八箇社の一つである妻垣社があります。



図2 宇佐市安心院町切寄遺跡

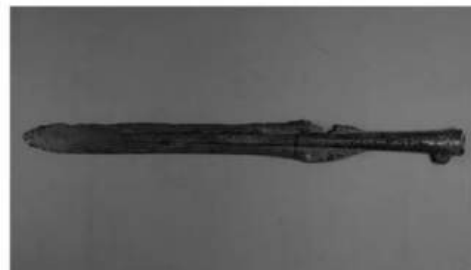


図3 切寄遺跡中広形銅矛



図4 宇佐市安心院町谷迫遺跡周辺

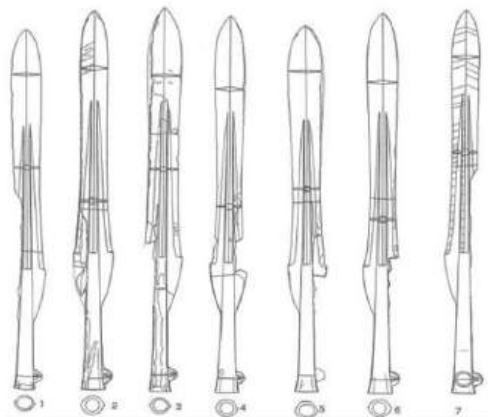


図5 谷迫遺跡中広形銅矛 (S=1/14)
(長嶺編 2007)



図6 宇佐市安心院町大字妻垣

旧宇佐市域では、川部遺跡から細形銅剣の切先1点が祭祀土坑から、大分県立宇佐高等学校から中広形銅戈1本、上原遺跡と小向野遺跡から広形銅矛が各2本、上平遺跡からも広形銅矛1本が出土しています。南森遺跡から銅矛または銅戈1本が出土したとされています。なお、『大分県史料』などの記載によれば、宇佐神宮には、前述した資料を含めて最大で銅矛2本、銅戈7本（うち1本は宇佐高等学校銅戈）が保管されていたと考えられます。

隣接する豊後高田市でも、雷遺跡から広形銅戈2本、横峰遺跡から広形銅矛2本が発見されています。来縄遺跡からは、12または13本の銅矛、丸山遺跡からは、3～12本の銅戈が出土したといわれています。このように、宇佐と豊後高田（国東半島西部）地域は、

大分県内でも弥生時代の武器形青銅器が多く出土している地域といえます。



図7 宇佐市小向野遺跡



図8 小向野遺跡広形銅矛

なお、宇佐・安心院地域で武器形青銅器が出土した位置をみると、旧宇佐市域では、駅館川中流域の丘陵や宇佐台地周辺、駅館川支流の流域に分布しています。安心院地域では、安心院盆地の南側丘陵と盆地東側に広がる上ノ原台地に集中しています。時期ごとの特徴を見ると、弥生時代中期には、細形銅剣切先が箱式石棺や祭祀土坑から出土した例が認められます。中期～後期には、安心院地域では中広形銅矛や銅戈が多数出土していますが、広形銅矛・銅戈は見つかっていません。一方で、旧宇佐市域では、中広形銅矛・銅戈の出土例はあまり多くなく、広形銅矛が多く確認されています。

4 青銅器の調査・研究最前線

青銅器にかぎらず考古学の調査・研究は、型式学的変化による時期区分や地域圏の検討などを中心に行われてきました。近年では、鉛同位体比による青銅器の産地推定や放射性炭素年代測定法による絶対年代の検討など理

化学分野での研究も進んでいます。そのような中で、資料を三次元計測によって測定することで、青銅器の「同範」（同じ鋳型で作られたこと）関係を明らかにする研究が行われています。伝岩屋遺跡（大分市）細形銅戈と、大分市住吉神社所蔵細形銅戈を別府大学と大分市歴史資料館が三次元計測を行い、型持孔（鋳型を支えるための孔）の形状を比較し、「同範」である可能性が高いことを指摘しました（下村・玉川・塩地 2020）。

また、青銅は銅と錫の合金で、鉛や亜鉛、ヒ素などを少量含む金属です。この中で、錫の量によって、融点やかたさ、色が変わります。青銅の色は、錫が5%以下で銅色、10～15%で金色、25%以上で銀色に変化します。弥生時代の青銅器は銅が約70～85%、錫が約10～25%、鉛が約5%含まれています。このことから、青銅器は現在のサビた青銅色ではなく、本来金色や銀色に燦めっていたことがわかっています。



図9 錫の量による青銅器の色の变化

5 特集展示「京博所蔵の銅剣・銅矛里帰り展」

「はじめに」で紹介した令和2年度京都国立博物館考古資料相互活用促進事業の借用資料について、企画展終了後も多くの方に大分県ゆかりの貴重な資料を観覧する機会を広く提供することを目的として、特集展示「京博所蔵の銅剣・銅矛里帰り展」（令和2年11月3日～令和3年2月28日）で展示を行いました。展示内容は、坊主山遺跡（臼杵市）広形銅矛、浜遺跡（大分市）中細形銅剣、大分市清水ヶ迫出土平形銅剣の展示と大分県の武器形青銅器を紹介するパネル展示です。

京都国立博物館は明治30年(1897)の帝国京都博物館として開館し、昭和22年に現在の名称に改称しました。館藏品と寄託品をあわせて約14,000点が収蔵されています。その中には、大分県立歴史博物館に複製品が展示されている赤塚古墳(宇佐市)出土の三角縁神獣鏡(国指定重要文化財)もあります。



図10 赤塚古墳三角縁神獣鏡(複製)

坊主山遺跡の広形銅矛7本は、広形銅矛が四国西部に分布するルートを考えるうえで貴重な資料です。浜遺跡の中細形銅剣は、大分県内で最も古い武器形青銅器が複数埋納された事例です。大分市清水ヶ迫の平形銅剣は、瀬戸内を中心に分布する平形銅剣の祭祀の広がりを考えるうえで重要な資料です。

坊主山遺跡銅矛など今回展示した資料が勢揃いしたのは、大分県立芸術会館で昭和63年に開催された「豊の国 創世記展」以来約40年ぶりのことで、大変貴重な機会になったと考えています。

6 まとめ

宇佐・安心院地域から出土した銅矛を中心に大分県内の武器形青銅器の変遷を紹介しました。弥生時代中期以前には細形の武器形青銅器が墓や祭祀土坑から出土し、宇佐では銅剣切先片が見つかっています。その後、中広形の武器形青銅器が県内各地に分布し、谷迫遺跡をはじめ宇佐や大分地域などで複数本を一括埋納する事例が確認されています。後期になると広形銅矛が宇佐や臼杵などで出土し、大分県は北部九州と四国をつなぐルート上にあったと考えられます。古墳時代になると、武器形青銅器を複数埋納する地区で大型の前

方後円墳が築かれています。

青銅器の調査・研究最前線では、三次元計測による同範銅戈が確認された事例や、青銅の色が錫の量によって変化し、本来金色や銀色に燦めいていたことを紹介しました。

最後に、大分県立歴史博物館の特集展示「京博所蔵の銅剣・銅矛里帰り展」に展示をされた京都国立博物館所蔵の大分県ゆかりの銅剣・銅矛から、弥生時代における北部九州や瀬戸内と大分県のつながりを紹介しました。

今回、大分県立歴史博物館の展示や郷土ゆかりの資料について紹介する貴重な機会を与えていただいた安心院縄文会に感謝いたしますとともに、会のますますのご発展をお祈り申し上げます。

【参考文献】

大分県教育委員会編 2018『大分県遺跡地図』

大分県史料刊行会編 1951『大分県史料』

考古資料

小柳和宏 1989「第1章 弥生時代 第4節 弥生文化の発展」『大分県史』先史篇Ⅱ 大分県

下村智・玉川剛司・塩地潤一 2020「大分市岩屋遺跡出土の細形銅戈と住吉神社所蔵銅戈の同範関係について」『史学論叢』49号 別府大学史学研究会

長嶺正秀編 2007『瑞穂の国の成立Ⅰ 豊前地方出土青銅器』荻田町歴史資料館

※図3, 8, 9, 10は大分県立歴史博物館所蔵品